

神頼みに不有

かつて、5月ともなると石狩は上り千魚の匂いがまちなかを被い、肌を滲みかかると、かきうほど獲れたものだ。どの家からもあの甘い佃煮の詰める匂いが漂ってきた。それほど身近な魚で、ニシンが去った後の風物詩でもあった。最近では漁の対象魚とは言えないほどの水揚げ量となり、ウラエ（仕掛け）も寂しい。むしろ、釣り新聞の紙上を賑わせている。しかも、初冬からの対象魚となつているからなお驚きだ。ニシンも年明け前には岸寄りが始り、魚の匂もわからなくなりつつある。季節の移ろいもひと月ほど狂い出しているような気になることさえある。▼天平の昔、聖武天皇の御代に災異思想のもと国分寺、東大寺を建立し、盧舎那仏に安寧の願いを込めるほど天変地異が続いたと「続日本紀」は伝えている。災害を天罰と捉え、天罰を受けぬよう良き政治を司るとの考え方をもっていた。非科学的とはとても言い切れない。鎌倉時代、鴨長明は度々の天災を体験し、無常観を「行く川の流れば絶えずしてしかも本の水にあらず」と「方丈記」に著した。東日本の大地震では地震学の定説を覆し、専門家をして想定外と言わしめた。比較するのもおかしいことだが、科学するのにもまた、人なのだ。正月に縁起の宜しくないと言われそうだが、現代に生きる我々は祈るだけではすまされまい。やはり「年の計は元日にあり、心してこの年を迎えたい。」（市長）

広告